

LOST BOYS 消えた少年たち

オースン・スコット・カード／小尾芙佐訳



消えた少年たち

オースン・スコット・カード／小尾芙佐訳



Hayakawa Novels

訳者略歴 1955年津田塾大学英文科卒，
英米文学翻訳家 訳書『アルジャーノン
に花束を』『五番目のサリー』ダニエル
・キイス，『第三の女』アガサ・クリス
ティー，『われはロボット』アイザック
・アシモフ，『竜の反逆者』アン・マキ
ャフリイ（以上早川書房刊）他多数

きしょうねん
消えた少年たち

1997年11月20日 初版印刷
1997年11月30日 初版発行

著 者 オースン・スコット・カード
訳 者 お 小 尾 美 佐
発行者 早 川 浩

発行所 株式会社 早川書房
東京都千代田区神田多町2-2
電話 03-3252-3111(大代表)
振替 00160-3-47799

印刷所 中央精版印刷株式会社
製本所 中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります
ISBN4-15-208121-X C0097

Printed and bound in Japan

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

消えた少年たち

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1997 Hayakawa Publishing, Inc.

LOST BOYS

by

Orson Scott Card

Copyright © 1992 by

Orson Scott Card

Translated by

Fusa Obi

First published 1997 in Japan by

Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan by

arrangement with

Bobbe Siegel Literary Agency

through Japan Uni Agency, Inc., Tokyo.

装画／影山 徹

装幀／ハヤカワ・デザイン

わたしたちの人生とともに歩み

チャーリー・ペンに

愛情と思いやりを惜しみなくあたえてくれた

エリン&フィリップ・アブシャー夫妻に

謝 辞

ここに感謝を捧げる。

ハロウィンの晩にこの物語の端緒となった即興話を聴いてくれたアブラチアン州立大学ワトウガ・カレッジの学生諸君に。

短篇のオリジナルに確信をもってくれたエド・ファーマンに。

あの短篇に対して心のこもった手紙を寄せてくれ、この物語の命綱となってくださった方々に。

深い洞察に満ちた助言と信じがたいほどの忍耐を示してくれた担当編集者、イーモン・ドランに。

この小説の前半を書いたあの海岸でさらに一週間を割いて共に過してくれたウエイン・ウィリアムズに。

この小説の後半に（その他もろもろについても）力を貸してくれたクラーク、キャシイ・キッド夫妻に。

大量の原稿をダウンロードしてくれ、数えきれぬほどの助力を惜しまなかったスコット・ジョーンズ・アレンに。

第八章の三つ目の言葉をあたえてくれたクラーク・L・キッドに。

視差的な見方を教えてくれたデイブ・ドラハイトに。

最新情報の提供と企画の進行に寄与してくれたジェイ・ウェントワースに。

新しい章が仕上がるごとに読んでくれ感想を述べてくれたエリン、フィリップ、ジョーンズ、キャシイ、ジェフ、エミリーに。

子供たちの命の維持、車の管理、床のモップがけ、物語と作家の両方の均衡に心を砕いてくれたクリスティンに。そしてこの話の核心であるチャーリー・ペンに。

目次

8	7	6	5	4	3	2	1	
分析屋	コオロギ	靈感	ハッカー・スナック	きつたない穴	ギャロウグラス	蛆虫	ジャンクマン	ぼうず
232	164	134	87	53	35	22	11	9

	15	14	13	12	11	10	9
解説／斉藤由貴	新年	クリスマス・イブ	神	友だち	ザップ	独立記念日	ジューン・バグ
493	488	457	421	387	341	310	273

ぼ う ず

これはああいう悪いことをしたときの彼を父親がどう呼んだかという話である。「そのときおまえはいったいどこにいたんだね、〈ぼうず〉？ 自分じゃいつたいたいをしてるつもりだったのかね、〈ぼうず〉？」

彼はこの言葉を心の底にしみこませ、その後、彼の悪い欲望はすべてこう呼ばれるようになった。だれにもおもしろくもなんともない悪戯を彼にさせちゃうのは〈ぼうず〉、学校のテストでなんだかズルをしたくなつたとき、それをやらせちゃうのは〈ぼうず〉、答えはぜんぶわかつてるくせに、ズルなんてもいなくてもいいのに。父さんと母さんがもう彼は寝たものと思っっているときに、クロゼットの中からのぞき見をさせるのは〈ぼうず〉、ふたりが犬みたいなことをやって、父さんの太ったおなかがゆきゆき揺れて、とっても白い母さんの体はぐつたりと死んだみたいで、おっぱいが魚みたいにひらべった

く両側にひろがっていた。〈ぼうず〉がやらせたことのなかじゃ、これがいつとうたちが悪い、あんなものをのぞき見させたりして、でも意外なことに〈ぼうず〉もほんとはそんなことはやりたくなかった、〈ぼうず〉は、そんなことをしたのを彼よりもいやがっていた、父さんがあんな悪いことをするのを見るなんて。

おれはぜったいあんなことはしないよ、と彼のなかにいる〈ぼうず〉は言った。あんなふうに女のひとを殺しちゃうなんてひどい、おまけにそのあとまたあんなことができるようにまた生かしておくなんて。

あのときから、おっぱいや秘密のあそこや、男を見つめて死んだようになってしまふ顔をもった大人の女のひとたちに会うと、〈ぼうず〉はどこかへ行ってしまう。〈ぼうず〉は、あんなゲームにくわわりたくないのだ。

だからといって〈ぼうず〉が消えたわけでもないし、なにも言わずに黙っていたわけでもない。〈ぼうず〉はあいかわらずそこにいるし、ときにはやりたいこともやったし、新しくやりたいこともいろいろと見つけどす。ただ〈ぼうず〉は用心がたりない。やりたいことはなんとしてもやってのけ、あとはさっさと隠れ家にひっこんで、あと始末はぜんぶ彼にやらせる、もともと彼はやりたくはなかったのに〈ぼうず〉がやってしまったことで

責めを受けなければならない。

いまでは家族も知り合いのひとたちも、彼を自分たちの子供のそばにはよせつけないようになった。〈ほうず〉がやらなければならないと決めたことのせいだ。

〈ほうず〉の畜生め！ 死んで地獄におちるがいい！

だけどあいづらぜったいしゃべらないと約束したんだ、と〈ほうず〉はいう。あの子たちはしゃべらないといったのに、あとでしゃべってしまった。

あたりまえじゃないか、この間抜けのいやらしい〈ほうず〉め？ あたりまえだろうが、この性悪〈ほうず〉？ 考えたことはないのかい、もしかしたらあいづらのなかにも別の〈ほうず〉がいるのかもしれないって、ぜったいしゃべらないとあいづらはおまえに約束したのに、その約束をやぶったのは、あいづらのなかにいる〈ほうず〉がそうさせたからじゃないのか？ という次第でここに至ったわけさ、これでわかったら、〈ほうず〉だってもうだれもおまえのそばに子供たちを近づけないから、おまえは腹がすけば自分をくちやくちや食わなきゃならない、喉がかわけば自分をがぶがぶ飲まなくちゃならないんだ。

いいやそんなことはしないよ、と〈ほうず〉はいう。おれは新しい場所をさがして、あいづらをそこへ連れこ

むさ、そうしてあいづらがしゃべらないと約束してもう信じないぞ。あそこに連れこんだらだれにもあいづらの居場所はわからない、あいづらは二度ともどらないから、ぜったいにしゃべりもしないさ。

そんなことはできないぞ、〈ほうず〉、だっておれがそんなことはさせないからな。

すると〈ほうず〉は彼のなかでげらげらと笑いつづける。それで彼にはわかった、自分はきつとやるだろう、新しい隠れ場所をさがして、〈ほうず〉のためにあいづらを見つけて連れてくる、そうして〈ほうず〉は自分のやりたいことをやる。〈ほうず〉は怖れを知らない。やろうと思っただけなんでもやる、だってあいづらはぜったいそこから出られないからぜったいしゃべることもないしね。

ストゥペンの小さな子供たちがつきつきと姿を消したのは、そして一九八三年のクリスマス・イブまでだれひとり発見されなかったのは、そんなわけだ。

1 ジャンクマン

これがその車だ、彼らがインディアナのヴィゴアからノースカロライナのストウペンまで走らせたのは。シルバー・グレイのルノー、18iデラックス・ワゴン、一九八一年型。走行距離はすでに四万マイル、そのうちの二万五千マイルは彼らが乗った。錆色の小さなあばたが塗料にうきだしはじめたところだが、電気系統はもうヒューズが十五回ぐらいふっとんでいるし、ドライブ・アクセルは三度も取り替えなければならなかった、というのもボール・ベアリングがひとつ磨耗するとその部品はそっくり交換しなければならぬように設計されているからだ。坂道を時速五十五マイルで登ることはできなくとも、革のパケット・シートに大人がふたりすわれて、後部座席には子供が三人すわれる。ステップ・フレッチャーが運転していた、日もだいぶ傾いてからやっとこさ家を出て、それからずっと運転している。がらんとした

家。インディアナポリスまでの道中ずっと残響が耳に残っていた。どこかちゅうで引越しのヴァンを追い越したにちがいないが、目にも入らなかったし、それと気づきもしなかった。ことによると引越しの屋の運転手がちゅうでマクドナルドかガソリンスタンドに寄ったのに気づかずに通り返してしまっただけかもしれない。

家族はみんなオハイオ川をわたるとすぐに眠ってしまった。ステップが平底船やインディアンとの闘いの話をさんざん聞かせたあとだったので、子供たちは本物を見てがっかりした。子供たちの心をとらえたのは橋のほうだった。それからみんな眠ってしまった。ディアンヌはすこしは目を覚ましていたが、そのうちに彼の手をぎゅっと握るなりシートの背と窓のあいだに押しこんだ枕に気持よさそうに頭をもたせかけたのだった。

いつもきまつてこれなんだ、とステップは思う。こっちが目をぱっちりあけているときは相手もぱっちり目をあけている、おれが眠気をもよおしてきてしばらく運転を代わってもらいたいなと思うと、いつも眠ってしまうんだ。

さしこんであったカセット・テープを奥まで押しこんだ。それは《青春の叫び》の甘いジャンキー・サウンドだった。久しく聞いていない。きつとディアンヌがヴィ

ゴアでせつばつまった買物に出かけたときに聴いていたのだろう。ステップはこのアルバムのテープを二度目のデートのときに彼女に聴かせた。いわばテストだった。

ディアンヌは宗教に関してはくそ真面目だったので、音楽に関する彼のいささか野性的な趣味を果してがまんして受け入れてくれるかどうか知りたかったのだ。モルモン教徒の女の子は、セックスをほのめかすようなくだりはおよそ気づかないものだが、ディアンヌはおそらくステップより頭が冴えているから、娘っこがジーンズを脱ぐ約束をしたのだの、ホモ同士めっちゃひどい喧嘩をするとかいうくだりはおろか、夜行列車につながるといったくだりもちゃんと意味がわかって、おろおろするわけでもなくただ笑っただけだったので、これならオーケー、信仰は厚いけど堅物ではなさそう、彼女の前でいつも聖人君子面をしなくてもだいじょうぶと見きわめがついたのだった。十年前、一九七三年のことだ。いまはルノーの18iワゴン、おそらくアメリカで売られた車のなかで最悪の車のバックシートに三人の子供を乗せ、ステップの就職先であるノースカロライナのストウペンに向かっているところだった。

いい仕事だった。年俸三万ドル、この不景気の年に、なりたてのほやほやの歴史学博士にとっては悪くない。

ただし歴史を教えるのでもなく、歴史の本を書くのでもなく、コンピュータ・ソフトウェアの会社でマニュアルを編集制作するのが仕事だった。プログラミングをするのでもない——「ハッカー・スナック」は、八一年代にはアタリ用のゲームとしてばか売れしたゲーム・ソフトなのに、ゲーム・デザインの仕事をくれる就職先もなかった。あのころは、ゲームのデザイナーとして当分いけるんじゃないかと踏んでいた。金もたっぷりあったので、大学にもどって博士号をとる余裕はあると思ったのである。そして不景気がやってきて、あのくそコモドル64がアタリを店頭から閉め出したおかげで、彼のゲームは絶版となり、マニュアル執筆の仕事のほかにはだれからも呼びがかからなくなってしまった。

そこでスプリングステインが、沈みがちな彼の心に合わせるように歌うのを聞きながら、ステップは山中へと車を進めた、日は西に傾き、道はおおむね東へ東へと暗闇のなかをうねうねと登っていく。おれはよろこぶべきなんだ、と彼は自分に言いきかせる。学位もった、いい仕事にもありつけた、それにたとえあのアホな64を使わなくてはならなくても、余暇にはまた新しいゲームをつくることができなともかぎらない。もっとひどいことになっていたかもしれないのだ。たとえばアップ

ルでプログラムの仕事にありつくとか。

自分を力づけるために言った言葉も、口中では挫折の苦い味がした。三十二歳、子供三人、それなのに下り坂を駆けつづつある。いつも自分のために仕事をしてきたが、こんどは他人のために働かなくてはならない。まるで倒産した広告会社で働いていたおやじみいだ。でもおやじには脊髄の一部を切除した傷跡が背中に残っていた。

おれのほうは目に見える傷跡はどこにもない。ある日順風満帆と見えたのが、翌日は特許権使用料が前回の四万ドルではなく七千ドルにがた減り。それであわてて職探しに駆けずりまわり、負債は四方八方山積み、おやじたちみたいにな一生破産状態で暮らすことにもなりかねない。それもこれもみんなおれのせい。おやじとおなじ給料の奴隷と化したわけだ。

だからといって、女房におふくろみたいにみじめな夜勤の仕事をさせるような辛い思いはさせない。彼女が働きたいと言うならそれでもいいが、さしせまって働かなければならない事態でもない。

とはいっても、こんなことを考えているうちにも、いつなるときそういう情況におちいるかもしれない——ヴィゴアの家は売るにも売れず、ローンを払いつづけるためには彼女が働かなくてはならないという事態になる

かもしれない。家を買うなんて愚かだったかもしれないが、あのときはいい投資だと思った。あそこに移り住んだときは世の中不景気ではなかったし、特許権使用料の収入もかなりのものだった。愚かものよ、あれが永遠に続くと考えるとは。永遠に続くものなどありはしないのだ。

わが身を哀れんでいると目もぼつちりと覺めて、それから一時間走りつづけた。テープが二度目の繰り返しに入るころフランクフォートに向かう急坂にさしかかった。まあよかった。州都ならモーターもあるはず。そこらまでならまだもちそう。ディアンヌはそこに着くまで目を覚ましそうもない。

「パパ」うしろの座席のステイーヴィが言った。

「うん？」ステップは答えた——低い声で言ったから、ほかの連中を起こさないように大きな声でしゃべってはいけないことが彼にもわかるだろう。

「ベッツィが吐いた」ステイーヴィが言った。

「ちよつぱりかい、それともたくさん？」

「ちよつと」

そのときうしろで、ごぼごぼと腹の底からこみあげるような音がした。

「わあ、だいぶすごいよ」ステイーヴィが言った。

くそくそくそ、ステップは無言で呪いの言葉をあげた。
「教えてくれてありがとうよ、スティーヴ」

車を路肩に寄せようとしているとき、また例の音がして、胃液の酸っぱい臭いがたちこめた。長時間のドライブではかならず子供たちのだれかが吐くことになるが、たいていそれは最初の一時間だった。

「なんで止まるの？」目を覚ましたディアンヌの声にはかすかなバニックがしのびこんでいた。なにか予期せぬことが起きると彼女はうろたえて、かならず最悪の事態を予想する。

スプリングスティーソンの歌はいましも、魚屋のおぼさん^{フィッシュマン}と屠屋のおづさん^{ブッチャー}のところにさしかかっていた。それでひさしぶりにステップは、ディアンヌにつけた愛称はこの歌からとったのを思い出したのだった。「おい、フィッシュレディや、においを嗅いでみたらどう」

「わあ、やだ、だれなの？」

「ベッツィねしょこ」スティーヴィがうしろで言った。

これもまた古い駄洒落^{だじゃれ}——ディアンヌはステップが子供たちにつけるのはずれなニックネームに以前は苛立ったものだった。ベッツィという呼び方が大嫌いだったけれど、ねしょこという駄洒落のおかげで、その名前がそのまま使われて、ベッツィ自身も自分もそう呼ぶようにな

った。

「ベッツィげろこのほうがいいかな」ステップが言った。
スティーヴィが笑った。

スティーヴィはおかしそうにげらげら笑った。ステップの顔もおもわずほころび、ふいに子供のゲロを片づけるのもそうたいしたことではないような気がした。

ステップは車を路肩ぎりぎりにとめた、そうすれば車線のほうに尻を突き出さずにベッツィ側のドアを開けることができるからだ。それでも、疾走する車がまきおこす風は気持のいいものではなかった。ひどい死にざまだ——後部のドアにパテみたいにはりつく、轢死カナベといったところだ。自分が子供たちの目の前の道ばたで死んだとしたら、それは子供たちにどんな意味をもつのだろうかという思いがふと頭をよぎる。下の子供たちはおそらく彼のことはおぼえていないだろう、どんな死に方をしたかも。しかしスティーヴィにはわかるだろう、スティーヴィはおぼえているだろう。ステップがこんなことを考えたのははじめてだった——スティーヴィの歳になれば起こったことはすべておぼえているだろう。もうじき八歳、彼の人生はようやくはじまったのだ、なぜならこれからは起こったことはすべてを記憶しているだろうから。